

国際協力特別賞

マイカのためにできること

北海道札幌国際情報高等学校 2年
大嶋 美春

私はこの夏、フィリピンへのスタディツアーに参加した。その案内には「ゴミ山見学」とあった。その頃の私はゴミ山に対し、そこに暮らす人々は貧しく、治安も最悪、もしかしたら命に関わることになるかもしれない、行きたくない、私には関係ない、そんなふうに思っていた。しかし、そこにはどんな世界があるのだろうか、この目で確かめてみたい、という思いがなぜか日に日に強くなり、ついに参加することを決心した。

ゴミ山のあるパヤタス地区。バスの扉が開いたとたん、飛び込んできた悪臭。いやだ、降りたくない、とっさに私は思った。しかし、「えっ、何これ。」予想もしなかった光景に私は言葉を失った。賑やかで楽しげな町並み。人々の笑顔。私たち見知らぬ外国人にも親しげに声をかけてくれる路上の人たち。いつしか暑さや悪臭など、全く気にならなくなっていた。それどころか、私ももしかするとここで暮らせるかも、とさえ思う自分に驚いた。「この気持ちは何だろう。」とまどいながら、あるお宅へ家庭訪問に向かった。途中には、粗末な家々、狭い迷路のような小道、ハエのたかった汚い水たまり、その光景に衝撃を受けた。どのくらい奥へ入っただろう、ようやく家庭訪問先の家に着いた。家の前で笑顔が可愛い女の子が出迎えてくれた。彼女の家は薄暗く、畳3枚分の広さ、まるで子どもの頃に遊んだ秘密基地ほどのスペースしかなく、そこに家族9人で住んでいるという。「あり得ない。どうやって寝ているの？」これが私のもった印象だった。人なつこい笑顔の少女に名前を聞くと、つたないアルファベットで、私のノートに名前を書いてくれた。マイカ、9才の可愛い女の子。「好きなことは何？」と聞くと、「勉強がしたい。」と言うマイカ。「どうして好きなこと聞いたのに、望みを言ったのだろうか」その時は、質問がうまく伝わらなかったのかぐらいで、ただ交流できたのが嬉しいと思っていた。

しかし、私がマイカに何気なく聞いた質問「好きなことは何？」その答えが、実はマイカにとっては、たった一つの願望で、それ以外選択できるものがなかったのかもしれない。そのことに気付いた時、私にとって「普通」の質問の意味は深く、残酷なものだったと思い知らされた。後に、彼女たちは出生届を出されず戸籍がない為、学校へ行くことができないと聞かされた。私は知らず知らずのうちに、学校に行くことや、「好きなこと」の選択肢があることを当たり前と決めつけていたのだ。そのことに、少しの疑問も持たずに…。

私は普段の生活の中で沢山のことに幸せを感じる。スイーツを食べた時、誕生日にプレゼ

ントを貰った時、ディズニーランドに行った時。では、マイカはどんなのだろう。マイカの生活に思いを馳せる時、「勉強がしたい。」と言ったあの一言が心につきささる。

私は、マイカが大好きになった。一生懸命名前を書いてくれたマイカ。自分も暑いのに、紙切れで扇いでくれるマイカ。目が合うと微笑んでくれるマイカ。帰りのバスの中で、「マイカに 50 ペソでもあげたかった。」と思った。そうすれば、その日のご飯は買えるから。しかし、マイカの気持ちを考えた時、そんな考えをもった自分に腹が立ち、涙が出た。私は無意識に、自分が恵まれていて、マイカは貧しいと決めつけていたのかもしれない。マイカのことを知った今、「このままこの状況を見て見ぬふりをして、何もしなくていいのだろうか」という思いが頭を離れない。

私は今まで世界を知るためだけに海外へ行きたいと思っていた。しかし、マイカと出会った今、マイカのような子どもたちの役に立ちたいという気持ちが強くなった。彼らが自分の夢や希望を語ることができ、それを実現できるよう考え続けていきたい。そして、ボランティアとして、共に生きていきたい。

いつの日か、またマイカを訪ね、お互い最高の笑顔で笑い合える日を信じて。